

地域と協同の 研究センターNEWS

2020年9月25日発行
193号

コロナ社会における生協の役割とは？ ～防災・被災地支援を通して考えてみる～

佐藤 圭三(生活協同組合コープぎふ参与)

「平成最悪の水害」といわれた「平成30年7月豪雨（西日本豪雨）」から2年、またしても「令和2年7月豪雨」が起き、九州地方を中心に記録的な豪雨災害が発生しました。熊本県や鹿児島県など広範囲で被害に見舞われ、10県が災害救助法の適用県となりました。被災された皆さまにあらためてお見舞い申し上げます。

私が暮らす岐阜県でも、河川の氾濫など局所的に大きな被害が発生しました。高山市、下呂市、八百津町、白川町で災害ボランティアセンターの設置が決定されたことを受け、7月12日(月)に「岐阜県災害ボランティア連絡調整会議」が招集され、構成団体として全岐阜県生協連から私も出席しました。ただし、元来は行政・社協・NPO等(生協も含まれる)が連携して被災地支援に関われるよう、役割を決め諸団体に準備してきましたが、今回は、被災地から「新型コロナ対策として地元住民を中心に行う」との方針が示され、広域的な支援活動を行うには至りませんでした。

新型コロナウイルスがもたらしたものは数多あげられていますが、災害対応も例外ではないことを実感しました。これからのコロナ社会の中では、これが当たり前になるのかもしれませんが。被災地支援のあり方も、まずは地域の単位で対応力をつけることが重要で、それを県や国として外から支援する二重三重の枠組みに転換していくことが必要だと感じました。そのためにも、ふだんから身近な地域の中で様々な人や組織が顔の見える関係を築いておくことの重要性を感じますし、その中で生協がどのような役割を果たしていくのかが問われていくと思います。

難しい課題に思えますし、これからのコロナ社会では「不寛容な今の日本が、より冷酷な社会になるのではないかと」危惧もされていますが、コロナ禍で商品の欠品等で組合員さんからのお叱りの言葉をいただくのは当然だ。しかしそのような中でも、「抽選外れてしまったけど、今はまだ家にあるから、困っている人に届けばいいわ」「職員さんや後方の方が潰れてしまっちは私の生協がなくなってしまう。だから夕飯1品来なくても問題ないわ」と言っただけの組合員さんと、真摯に向き合える職員がいる生協であれば、コロナ社会の中でも新しい役割を果たせるよう成長していけるのではないかと思います。

(下線部分は、「第2回協同の未来塾」升宏美さん(コープぎふ益田支所)の事前レポートから引用させていただきました。)

(さとう けいぞう)

研究センター9月の活動

5日(土) 第2回共同購入事業マイスターコース	16日(水) 第2回協同組合等研究組織交流会②
9日(水) 第2回協同組合等研究組織交流会①	18日(金) 第3回協同の未来塾
10日(木) 三河地域懇談会世話人会(オンライン三相談会)	19日(土) 東海交流フォーラム実行委員会
11日(金) 第4回常任理事会	理事懇談会
12日(土) 第4回市民が協働を学ぶあう講座 公開パネルディスカッション	24日(木) 金城学院大学「協同組合論①」
	30日(水) 三重地域懇談会世話人会

※ コロナウイルス感染拡大予防のため、予定していたさまざまな活動を自粛しています。

目次	コロナ社会における生協の役割とは？～防災・被災地支援を通して考えてみる～	1	第二期「市民が協働を学ぶ講座」が開催されました！	2
			情報クリップ	5
			企画案内	8

第二期「市民が協働を学ぶ講座」が開催されました！

文責・事務局 熊崎辰広

第一期の「市民が協働を学ぶ講座」は、2018年10月5日から2019年3月1日の期間に7日間開催し、計11の講座と事例発表・グループワークを行いました(内容については『地域と協同』10号でまとめています)。2019年には、第一期の次のステップとして、愛知県設楽町名倉、および岐阜県白川町黒川でのフィールドワークを実施しました。

第二期は、地域の状況や行政の施策を学ぶ場と合わせて、現地での、フィールドワークの講座を検討し、コロナ禍も考慮し参加もzoomを利用したオンラインで行えるように準備し開催しました。この8月から9月の短期間に4回の講座を開講しました。第1回は愛知県新城市(八名地域)、第2回は岐阜県飛騨市(宮川地域)第3回は愛知県豊田市(稲武地域)と設楽町(名倉地域)、第4回はこの3つの事例をうけてのパネルディスカッションという内容で実施しました。

第1回8月2日愛知県・新城市(八名地域)

会場・やなプラザ(旧JA八名店)

現地参加が8名、オンライン参加が8名での開催でした。

はじめに八名地区の振興事務所長の松井良久氏が、地域の状況について報告されました。緑豊かな生産地域ですが専業農家は減少し、耕作放棄地も増えてはいるが、定年帰農などでハウス栽培も増えている。平成25年度からの地域自治区が設定され、行政に頼らないで住みやすい地域づくりが進められている等とのことでした。

次に前澤このみさんから住民自治条例づくりの報告がありました。第一期の講座とほぼ同じですが、あらためて現地での報告で、より実感のあるものでした。制度がつけられて終わりではなく、若者の参加や、中学生議会や女性議会など、その後の発展もみられます。

二人の報告の後、「やなマルシェ」主催、地域協議会のメンバーでもある加藤久美子さんの司会ですすめられました。まず建物の外に出て周囲の環境や建物の紹介があり、「やなプラ



加藤久美子さんと新城市市長 穂積亮次さん

ザ」内の施設紹介と、さらに中学生の総合学習「やなマルシェのこれから」でつくられたいくつかの提案パネルの紹介、その授業を進めた教師の発言もありました。そして、地域協議会が交付する助成金を使って、地域課題を主体的に解決するための『やなまるっ人(と)』の紹介がありました。「まるっ人農園」、軽車両を改装しての移動販売の実施等、活動の広がり見られます。地域から求められている事で、活動が楽しいからやるという加藤さんのリードも大きいと感じました。

次に新城市市長の穂積亮次(ほづみ りょうじ)さんからお話を聞かせていただきました。自治基本条例の下に10の地域自治区を設定し、その下の実行部隊として振興事務所を置き、市職員が配置されています。所長は、従来なら部長クラスの職員が担っていたということですが、それを民間から任用することを決め、東郷・舟着地区にはコープあいち元副理事長の八木憲一郎さんが就任されています。地域福祉の担い手となる社会福祉協議会(社協)の会長も、民間任用で前澤さんが就任しています。

生協での経験が、この住民自治に活かされているようです。

八木憲一郎さんも、最後の挨拶の中で、生協とは比べられないほど、手間をかけての住民参加の活動となっていて、若者や女性の参加の広がりがある、住民参加で協働の力を生み出している等言われていました。今回は、オンラインの参加もあり、フィールドワークでありながら、オンライン参加でも有効な議論がうまれ、今後

のいろいろな可能性を実感する企画となりました。

第 2 回 8 月 3 日岐阜県・飛騨市（宮川地区）

会場・飛騨市役所と宮川振興事務所



飛騨市長 都竹淳也さん

現地参加 7 名、オンライン参加 8 名の参加でした。

午前中 1 時間ほど飛騨市長 都竹

淳也（つづく じゅんや）さんから「持続可能なコミュニティ（安心して住み続けられる地域づくり）のために」というテーマでお話を聞きました。過疎化・高齢化のすすむ人口動態の地域、いわば過疎化の先進地で何ができるか、あんきなくらしのために多様な業者との生活弱者支援体制を断行し、共助的民間支援の推進を進めているとのこと。また、介護人材の不足を補うために、年齢に関係なく資格のいらぬ「支え合いサポーター」を導入し、80 歳以上でも支える側に回っている事例などが紹介されました。高齢者の生活課題として 4 つを挙げて、その取り組みを紹介されました。①**買物困難**。市内を 5 つの地区に分け、それぞれの地区で運行されている、移動販売車に対しての補助を出している。導入時の車両に 300 万円、年間の事業経費に 1 車 100 万円、社会貢献の費用として計上している。②**雪またじ（おろし）**。豪雪地帯でもあり、高齢者の雪おろしの負担を減らすために、雪おろしサポートセンターにより、積もったら雪おろしを行う。③**外出**。公共交通機関を使ったお出かけ支援を実施。④**食事**。ケアプランによる栄養管理、また補聴器の補助も実施している。

生協と行政の連携による地域複合型サロンづくり（昼から宮川振興事務所ですましました）。最初にできた宮川地区でのサロン「み～んなよらまいか」は、集まっておしゃべりと同時に買物のできる場として、市内 7 地区で開催されるようになるということです。

上記計画遂行のために、現状の職員体制のなかで 10 月から 12 月にかけて議論をすすめ時間

をかけているということです。また、「計画は作ったら終わりではなく、つぎの段階でこわしていくこともある」ということでした。

昼には、旧宮川村の振興事務所に会場を移しました。

宮川振興事務所所長さんより宮川地区の紹介がありました。現在 260 世帯、613 人。高齢化率は 46% で、なかなか生活環境を維持していくことが難しくなっているということです。紹介できるものは「鮎」（あばれ鮎ともいわれ、大きくておいしい）、「種蔵」（棚田のある原風景）、漫画（以前に漫画で村おこしとして、声優さんの合宿のあった）、また水芭蕉の咲く池ヶ原湿原があります。

サロン「み～んなよらまいか」主催のよらまいかびいず代表の平澤百合さんからお話を聞かせていただきました。JA の店舗がなくなり、買物支援の第 1 回のサロンには「さくら」で参加したということですが、それではつまらないので、開催する方に回り、8 人の個性ある人が集まり「よらまいかびいず」を結成したそうです。募集し、その後、季節的な行事を中心に企画を進めているということです。JA の助け合いの会「やまびこの会」のメンバーでもあり、これと合同の会も開いていて、年末には、警察官による防犯寄席、防火の話や、診療所の看護師さんによる手洗いの実習なども実施しているそうです。コープぎふ「くらしの活動部」の松原滋さんからサロンづくりの報告もありました。市と一緒に連携事業を起案し、広報で紹介し、3 回の実証実験を実施。①2017 年 11 月 15 日、この日は市長も参加し、「おたがいさまひだ」から運営のノウハウを指導してもらう。②2018 年 1 月 24 日、振興事務所にて生協の事業を紹介。③2018 年 3 月 14 日、事務所の 2 階でお店を作って開催。この年の 4 月から、平澤さんたちの自主的グループの「よらまいかびいず」によって開催がすすめられるようになったということです。ただ、今年に入ってからにはコロナ禍で開催ができず、サロンをやっている人たちの交流ができていないということです。コープ共済連から活動補助を得ているので、あと、2～3ヶ所のサロンづくりを進めたい、と松原さんは言われていました。

平澤さんは、「ありがとう」といわれるのが

楽しく、それがパワーの源になっていると言われていました。これは「やなマルシェ」の加藤さんと同じ立ち位置で。地域活動の大切な原点ではないでしょうか。

第 3 回 8 月 22 日 愛知県・豊田市（稲武）

～設楽町（名倉地区）

この日は現地参加がなく、全員がオンラインで 15 名が参加しました。会場は生活サポートセンター名倉です。

まず設楽町にある福祉村キラリントープと生活サポートセンターの紹介を相談支援専門員の篠原豊郷さんからいただきました。福祉村は 1998 年に障害者が自立して豊かな人間らしい生活できることを目指し、コープあいちの支援や国の補助金などを得て建設されました。9 つのハウスに各 5 人が個室を持って共同生活をしています。日中はハウスから離れ、農耕班、木工班などに分かれ仕事に従事し、名倉小学校での福祉体験なども行っています。

次に「いなぶ健康アカデミー」の活動紹介です。日中は足助病院で、理学療法士として働いている永井雄太さんから報告をいただきました。専門的な知識・技術を生かして、高齢化の進む稲武地域へ貢献できる仕事をしたいと思い、同じ志を持つ仲間の感染認定看護師岩本里美さん、言語聴覚士和田浩成さんと 3 人で、専門職として、地域の中で講演活動や情報誌を発行してきたそうです。2019 年度には 20 回以上開催したという各種講演会の活動も、コロナ禍で休止となっていますが、岩本さんの専門を生かし「新型コロナウイルス感染症予防の手引き」をまとめ、1500 部ほど発行し、配布したということです。好評で、改定版も検討中ということでした。

名倉地区のふれあいサロンについては、ケアマネージャーの篠原和子さんから報告を聞きました。2011 年から 2 年間足助病院スタッフによるロコモ予防教室が町内全域で開催され、それが契機となり名倉地区 4 つの地域で、それぞれ自主的な健康教室が開催されました。2013 年からは設楽町の地域介護予防活動支援交付金（最大 40 万円）の支給がはじまり、サポートセンターの地域貢献活動への積極的取り組みとして、地域コミュニティネットワークに取り

組み、名倉地区でふれあいサロンが始まりました。2019 年度では各サロン合同による「いなぶ健康アカデミー健康教室」が 6 回開催され、のべ 47 名が参加しています。2020 年度はまだコロナ禍のため開催できていませんが、何かできないかと検討中ということです。

つぎに新型コロナウイルスに関する市民活動の紹介として、まず岩本里美さんから、ブラックライト（紫外線発光機）をつかって、汚れ落ちを見ることで手洗いのポイントをわかりやすく解説してもらいました。また言語聴覚士の和田浩成さんからは、頭部の筋肉と骨格の構造がわかる模型を使い、免疫力を高める唾液線を刺激する親指の動かし方のポイントの説明があり、オンラインによる実技指導となりました。

最後に、相談支援専門職の篠原豊郷さんから重症心身障害児 R ちゃんの事例が紹介されました。R ちゃんを特別支援学校ではなく名倉小学校に通わせるための、さまざまなサポートの内容が紹介されました。そこにある支援活動の考え方として、2001 年に世界保健機関（WHO）総会で採択された ICF（国際生活機能分類）モデルを使うということでした。単に心身機能の保持だけでなく、そこに「活動」と「参加」の要素を加え、個人因子や環境因子を考慮し、できることを進めるということ。脳機能全廃といわれた R ちゃんが、声掛けの刺激からわずかに反応をしめすようになった、という感動的な報告もありました。小学 4 年生の R ちゃんの、中学校進学への模索が続いています。

今回の報告は、前 2 回（新城市八名地区、飛騨市宮川地区）と違い、過疎化高齢化の地域での、専門的な知識や技能の役割がクローズアップされた内容となりました。「いなぶ健康アカデミー」のような志のある活動が、地域のなかで定着し、発展することができれば、他の同じような中山間地域の活動として、大いに参考となるように思います。

また 3 地域とも、まだまだ発展進化する可能性を秘めているようです。そのための、いわば触媒としての「地域と協同の研究センター」の役割があるように思います。

（文責：事務局 熊崎辰広）

情報クリップ



co・opnavi 2020.9 No.820
コロナ渦中での生協の事業継続と地域応援
日本生活協同組合連合会 2020年9月、A4判、36頁、367円

<コープ商品のある風景>

CO・OP 商品 60 周年総選挙 2020

コープみらい 組合員理事 巽空満子さん

第一特集

コロナ渦中での生協の事業継続と地域応援

第二特集

ICT（情報通信技術）によって

組合員が生協に関わりやすくなりました

<今日も笑顔のコープさん 生協の仲間のお仕事拝見>

鳥取県生協 丹羽祥太さん

<想いをかたちにコープ商品>

CO・OP 食塩不使用マカデミアナッツ

<生協大好きママ コプ山さんの 教えて！CO・OP 商品>

CO・OP 北海道のそのまま枝豆

<ZOOM IN 生協の店舗づくり>

京都生協 コープ山科新十条

<この人に聴きたい>

気象予報士

関口奈美さん

<ほっと navi>

福井県民生協

日本生協連

月刊 J A 2020.9 vol.787

全国農業協同組合中央会 2020年9月、A4判、48頁、年間予約5,204円（消費税込）

J A 全中会長再任にあたって

中家 徹（第 15 代 J A 全中代表理事長）

スゴイ農業、スゴイ J A

J A 自己改革の現場から

40 年のバルシステム生協との提携を通じて

地域農業を支える J A ささかみ（新潟県）

和泉真理

J A ・農政トピック

「J A の自己改革に関する組合員調査」最終結果報告

ー組合員の「声」をもとに不断の自己改革を実践

J A 全中 J A 改革推進部

きずな春秋 ―協同のこころ―

童門冬二

列車に乗って、牛乳を飲みに行く

蜂谷あす美

私のオピニオン ①

小熊英二

私のオピニオン ②

桜木紫乃

J A 全中 マンスリーレポート 8 月

協同組合の広場

（日本生協連、J F 全漁連、全森連、WN J）

協同組合と SDG s 第 16 回

はたらく喜び 暮らしに笑顔

株式会社 いずみエコロジーファームの取り組みを紹介します

大阪いずみ市民生活協同組合

地域を元気にする人たち

山岡享一郎 / 小林味愛

海外だより [D.C. 通信] 連載 111

貿易交渉への働き掛けを強めるアメリカ酪農・乳製品業界

伊澤 岳

第 33 回 広報活動優良 J A 紹介

地域密着型広報活動の部

優秀賞 J A 十日町（新潟県）

ウェブメディア活用部

優秀賞 J A びほく（岡山県）

生活協同組合研究 2020.9 No.536

プラスチック汚染・脱プラスチック

公益財団法人 生協総合研究所 2020年9月 B5判 80頁

■ 巻頭言

環境問題に取り組むということ

大信政一

原田禎夫

特集 プラスチック汚染・脱プラスチック

世界で広がる脱プラスチックの動き

プラスチック問題に関する国内外動向と俯瞰的理解

ー混乱する議論の解きほぐしから始める

問題との向き合い方ー

田崎智宏

欧州の生協におけるプラスチック削減の取り組み
 トッパンのサステナブルパッケージソリューション
 脱プラスチック社会の実現に向けた
 コープこうべの取り組み
 生活クラブのグリーンシステム
 脱プラスチックがもたらす生活革命
 いかに仕組みをつくれるか

佐藤孝一
 川田 靖
 鬼澤康弘
 山本義美
 小松遥香

■新型コロナウイルスへの各国生協の対応 ⑤
 協同組合・相互扶助の保険組織と COVID-19 (下)
 小塚和行

フィンランドの生協と COVID-19
 鈴木 岳

■本誌特集を読んで (2020・7)
 嶋田順一・林 薫平

■新刊紹介
 幡谷則子編 『ラテンアメリカの連帯経済』

鈴木 岳

柏井他編 『西暦二〇三〇年における協同組合』

鈴木 岳

●公開研究会

「人生 100 年時代の老後資金と資産運用」
 (9/29・四ツ谷)

「労働者協同組合を学ぶ」 (10/15・四ツ谷)

「アジア生協協力基金 2021 年度・
 助成金一般公募のご案内」

生協運営資料 2020.9 No.315
より多くの想いを集め 2030 年ビジョンを策定する
 日本生活協同組合連合会 2020 年 9 月 B5 判 84 頁 886 円 (送料別)

巻頭インタビュー

●わが生協、かくありたい!

「頼もしき隣人たらん」の志を掲げ、
 今後も親しみのある生協を目指す
 京都生協 ●代表理事 理事長 畑 忠男氏

特集

より多くの想いを集め 2030 年ビジョンを策定する

- 1 創立 100 周年は「通過点」。次の 100 年に向け
 地域で支持され続ける生協を
 組合員と共につくり上げる
 コープこうべ ●100 周年 P J T 統括
 佐藤寿見子氏
- 2 次代を担う若手・中堅職員を中心に
 10 年後の生協のありたい姿を描いていく
 生協ひろしま
 ●常勤理事 宅配事業本部 副本部長
 仲間づくり・共済推進部 統括部長
 新規事業管掌 高浦美穂氏
- 3 ミレニアル世代の職員から見た
 生協の現在と未来
 コープおおいた ●代表理事 理事長 青木博範氏
 組織支援本部 役員室 理事会事務局 志賀なつき氏
 組織支援本部 役員室 広報課 原田恵実氏
 組織支援本部 役員室 組合員活動 G 重石奈美氏
 組織支援本部 商品政策室 新名聖奈氏
 人事教育スタッフ 島崎菜美氏

- 4 たすけあいの輪を広げ、組合員と共に一生涯の
 安心をつくる「CO・OP 共済 2030 年ビジョン」

コープ共済連 ●

総合マネジメント本部 本部長 前田かおり氏
 経営企画部 部長 河上真一氏

連載

●これからの店舗事業のあり方を考える
 第 26 回

地域に役立つ事業として成り立つ

店舗に再生するための挑戦

コープかがわ ●代表理事 理事長 木村 誠氏

●全国生協の宅配事業・宅配センター運営を学ぶ
 第 39 回

新しく入協した職員が展望を持って

働き続けられる職場環境づくり

コープあおもり

●機関運営部 人事育成担当 山村了一氏
 人事開発担当 佐々木萌氏

特別企画

ユニバーサル農業と GAP でつくる持続可能な農家経営
 京丸園株式会社 ●代表取締役

鈴木厚志氏

文化連情報 2020.9 No.510
会員の協同で安心、安全な地域づくりを広げよう
文化連第 72 回通常総会を開催

日本文化厚生農業協同組合連合会 2020 年 9 月、B5 判、96 頁、文化連情報編集部 03-3370-2529 *注

会長就任ご挨拶 会員の協同で安心・安全な地域づくりを広げよう 八木岡努	変わる日本のまちづくり (3) プロの市民をともにめざす： 「校舎のない学校」のライフサポート事業 杉岡直人 畠山明子
退任ご挨拶 文化連らしさを発揮し、 時代の流れに沿った会員貢献活動を 神尾 透	ドイツの対 COVID-19 戦略 コロナ禍で変わったこと、変えなかったこと 吉田恵子
理事長就任ご挨拶 加速する社会変化を見据え 会員貢献に全力を挙げていきます 東 公敏	私たちは何を食べているのか (4) 農薬の人体汚染は待たなし 相次ぐ警告 (1) 除草剤グリホサート 安田節子
日本文化厚生農業協同組合連合会役員紹介 日本文化厚生連第 72 回通常総会を開催 農協組合長インタビュー (66) 有機野菜や産直で安全・安心を消費者へ 神生賢一	臨床倫理メディエーション (44) 再びの安楽死と尊厳死 — 生と死をめぐる意思決定 中西淑美
院長インタビュー (321) コロナ後の社会 人々に「安心」提供する病院へ 富満弘之	多様な福祉レジームと海外人材 (28) 新型コロナウイルス感染症と製造業 安里和晃
二木教授の医療時評 (183) 日本の病院の未来 二木 立	全国統一献立 宮崎県と大分県の郷土料理 冷や汁・とり天 桑原ともみ
新基本計画の諸論点 ④ 集落営農の持続性確保 田代洋一	アフガニスタンから見た世界と日本 (4) 新型コロナウイルス感染が及ぼした世界秩序への影響 レシヤード カレド
地球と人間の危機 — コロナ災禍に向き合う 伊藤澄一	デンマーク & 世界の地域居住 (135) マーケティング感覚で地域おこしにチャレンジ 「分校 Café haruhi」 (佐賀県嬉野市 2) 松岡洋子
本田徹医師インタビュー 臨床医と保健 NGO 活動従事者としての軌跡 (2) 途上国の人たちとの分かちあい 本田 徹	野の風 ● コロナ禍と若者の生存権 池上正示
アメリカの医療政策動向 (2) コロナ禍に揺れるアメリカの医療保障 高山一夫	熱帯の自然誌 (54) アブラヤシ産業 安間繁樹
	ドイツの介護保険制度 (12) ディアコニースタチオン・フランクフルト・アム・マイン (4) 介護改革の評価 小磯 明
	▶線路は続く (146) 京都・嵯峨野トロッコ列車で光秀の舞台へ ／ 西出健史

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究機関などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内

2020年度 ぎふコラボ友の会 総会・記念講演会

「コロナ危機の中で未来を展望する」

講師 斎藤幸平氏（大阪市立大学大学院経済学研究科准教授）

現代社会は、コロナ危機に有効に対応できていません。新型コロナウイルスをはじめ感染症の頻発や危機的な気候変動など、地球規模で人と自然のかかわり方が問われています。コロナ禍は、社会的格差や環境破壊という現代社会が抱えている危機を私たちの前にあぶりだしました。この危機をどう打開するのか、新進気鋭の経済思想家、斎藤幸平さんの講演です。

日時 2020年10月31日（土）14:00～17:00（受付13:30）

第1部 友の会総会 14:00～活動報告、決算、予算、人事

第2部 記念講演 15:10～「コロナ危機の中で未来を展望する」講師 斎藤幸平氏

会場 大垣市情報工房 スィンクホール

（大垣市小野4-35-10 TEL0584-75-7000）

定員 150名

*新型コロナウイルス感染症対策にご協力ください。記念講演のみオンライン（ZOOM）視聴希望の方は10月29日までに下記アドレスにて申し込みください。

〈斎藤幸平さんのプロフィール〉

1987年生まれ。大阪市立大学院経済学研究科准教授。専門は経済思想・社会思想。『大洪水の前に－マルクスと惑星の物質代謝』（堀之内出版）により、権威あるドイッチャー記念賞を、日本人初、歴代最年少で受賞。編著にマルクス・ガブリエルらとの対談集『未来への大分岐』（集英社新書）など。

主催：弁護士法人ぎふコラボの会 大垣市室町2-25

【問い合わせ・申し込み】電話 0584-81-5105 メール:seinolaw@nifty.com

* コロナ禍の中、急な変更があるかもしれませんので、確認の上ご参加ください。
当日の連絡先 080-3453-4445

地域と協同の研究センター10月の予定

1日（木）名市大寄付講義① 金城学院大学「協同組合論②」	10日（土）三河地域懇談会「豊橋生協会館へ寄らまいかん」
2日（金）第1回組合員理事セミナー	15日（木）名市大寄付講義③
3日（土）第3回共同購入事業マイスターコース	16日（金）～17日（土）第5回協同の未来塾
8日（木）第5期協同の未来塾実践交流会 名市大寄付講義②	22日（木）名市大寄付講義④
金城学院大学「協同組合論③」	23日（金）第2回組合員理事セミナー
9日（金）第5回常任理事会	29日（木）名市大寄付講義② 金城学院大学「協同組合論③」
	31日（土）第4回共同購入事業マイスターコース

企画は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止・延期することがあります。ご参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センターNEWS193号

発行日 2020年9月25日 定価 200円（税・送料込み）

年会費には購読料が含まれています

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事 鈴木 稔彦

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>